安田女子大学大学院紀要　第26集
日本語学日本文学専攻

清末・金士恒「三友暢飲図」考

内田誠一

要旨

金士恒は清朝末期の陶芸家であり、一八七八（明治一一／清光緒四）年の春に名古屋の常滑に来て、中国宜興の打身筒技法（俗称：パンパン技法）を伝えた人物として知られている。しかし、その一生は謎に包まれており、生卒年はおろか、来日前や帰国後の活動さえも全く不明である。

本稿では、金士恒の余技ともいえる書画作品の中から、水墨画の作品である「三友暢飲図」（京都・個人蔵）に焦点を当て、その画や題詩について些か論じた。

キーワード

清末、金士恒、陶芸、宜興、書画

一、序

金士恒（生卒年未詳）は、中国清末の陶芸家・書画家・篆刻家・鑑定家である。多芸多才な人物で、一八七八（明治一一／清・光緒四）年の春に尾張の常滑に来て、中国宜興の打身筒技法を伝えた（来日は前年ごろと思われる）。筆者は、二十年ほど前に金士恒の存在を知り、その事績について少しずつ調査を始めた。しかし、一生が謎に包まれた人物であり、筆者が発掘できた新事実は、寔に寥寥たるものに過ぎない。これまで筆者は三度、金士恒について学会発表をおこなったことがある。発表題目は、「清末の陶芸家・金士恒―その人物と書画」（第五回書法文化書法教育国際会議、安田女子大学、二〇〇六年七月）、「清末の陶芸家・金士恒について―通説に対する疑問を中心に」（茶の湯文化学会平成二二年度大会、名古屋文化短期大学、二〇一〇年六月）、「金士恒の書画篆刻について」（中国地区大学書道学会、松江・サンラポーむらくも、二〇一二年十二月）である。だが、もう少し新事実を掘り起こそうと思ってい

たため、これまで論文化することはなかった。現在に至るまで、金士恒の来日前、帰国後の動静を物語る新資料は出ていないようで、今もなおその人物像は雲霧の中に隠れている情況である。

幸いなことに、中国の経済発展とそれに伴なう美術品オークションの盛況によって、金士恒の作品が大陸でも評価され、オークション市場に競売品として出品されるようになった。中国オークションサイトの「雅昌芸術品拍売網（雅昌芸術品オークションネット）」（https://auction.artron.net/）では、大陸および日本の代表的オークションに出品された中国の芸術作品の画像を検索することができる。金士恒の作品は、年によってばらつきがあるものの、ここ五、六年前から出品数が増えているようである。作品に記された識語から、制作年代や制作地が判明するので、実に貴重なデータである。今回、金士恒の「三友暢飲図」（京都・個人蔵）について考察するが、雅昌芸術品拍売網のデータを活用することによって、作者の日本における制作態度も、朧気ながら見えてきたように思われる。

二、金士恒について

金士恒、字は子友、江蘇彭城（現在の徐州市）の人。墨軍、墨壺主人、金麻子などと号した。十三歳の時に父に伴われて上海に出て、瞿応紹（号は子冶）の門に入り、詩書画や陶芸を学んだと言われているが、疑問もある。長崎の美術商・佐野瑞嵒の勧めに応じて、一八七七（明治一〇／清光緒三）年ごろに来日。はじめ名古屋に居て、翌年一八七八年の春に、陶工の鯉江方寿・高司父子の招きで常滑に行き、轆轤を用いずに茶銚（急須）を造る、中国宜興の〈打身筒技法／dashentong jifa〉（俗称：パンパン技法）を伝えた。なお中国では、この技法を「紫砂陶拍打鑲接技芸」とも呼ぶ。同年秋には名古屋にもどった形跡があるが、それ以降の動静は不明である。明治時代の煎茶ブームに乗じて、その作陶をはじめ書画篆刻などの作品も数寄者たちより高い評価を博した。現在も、常滑焼の蒐集家や煎茶人にその名を知られている。金士恒の中国における創作活動については全く不明である。

三、「三友暢飲図」について

本作（図1）は、その款記から一八七九（明治一二／清光緒五）年冬に描かれたものと知れる。法量は一三六・五×五二・二糎。紙本墨画・胡粉。客観的に見て、金士恒の絵画作品の中でもかなり作ゆきの良いもの。本作と同じ年款のある作品が、図録『金士恒展』（常滑市民俗資料館、一九八六年）十三頁に掲載されているので、両者を対照させて考えるのがよいかと思われる。

図1　「三友暢飲図」

二

「時在光緒五年己卯冬日、於東海之東蘆都麗殿月揚楼」と款記のある「蘆雁図」がそれである。同図録において、山田陶山氏は次のように記している。

明治十一年の秋に名古屋に居られたことは白磁の酒盃に「洞天一品図」を上絵付けした作品に「光緒四年戊寅秋九月　浪越の客次において」と書き添えてありますので之によって立証されます。そして其の翌年の光緒五年に描かれた芦雁の図には「時在光緒五年己卯冬日、於東海之東蘆都麗殿月揚楼云々」と記されており此の頃は既に中国に帰っていたことを知り得るのであります。なお蘆都は現在、合肥と云われている安徽省中部の都市で中原と江南を結ぶ要地として古くから開け蘆州とよばれていた古都であります。

山田氏は「蘆都」を中国の合肥（現在の安徽省省都）と断定しているが、そうではあるまい。金士恒は「東海之東蘆都（東海の東の蘆都）」としている。「東海之東」とは中国ではなく、日本と考えるべきである。また、合肥の地を古来「廬」、「廬州」と称するが、金士恒は画賛において、「廬」（ロ・いおり）の字ではなく草冠のついた「蘆」（ロ・あし）の字を書いていることに注目したい。山田氏は魯魚の誤りによって、合肥と断定してしまったわけである。

ならば、「蘆都」とはどこであろうか。蘆都は蘆の国の都、即ち日本の都の意であろう。日本は「葦原の国」と呼ばれていたからである。日本において蘆雁図を描いたので、「葦原国」と関連させて、日本の都を「蘆都」としたのであろう。誠に当意即妙の款記である。金士恒は、日本人の興味を拽く術を持ち合わせていたようである。それでは、「蘆都」は東京を指すのであろうか、それとも古都の京都を指すのであろうか。前年に愛知の常滑に長期滞在していたことから、この年には常滑から遠くない京都に赴いた可能性が高いであろう。しかし、東京の可能性も否定できない。

さて、本作にもどろう。一見すると雪の散らつく中に松竹梅（歳寒三友）が描かれている（図2・3）ので、「歳寒三友図」であると考える向きもあろう。しかし、画面中央に紹興酒の大甕が配されており、それを取り囲むように松竹梅の三友が描かれている。そして画賛（題詩）に「三友暢飲」の語があるので、「三友暢飲図」と題すべきものと思われる。古来、「歳寒三友図」は多くの画家によって描かれた普遍的な画題であるが、紹興酒の甕を取り合わせたものは珍しく、まさに江南の陶芸家・金士恒の面目躍如たる作品と言えよう。

図2　松樹と松傘の部分拡大

図3　竹と梅の部分拡大

画面左上の、松の枝二本（上）と梅の枝一本（下）、そして松の幹や枝（右）とに縁どられたかのような空白部分に、隷意の強い楷書・行書によって次のような四言詩が書かれている（図4）。

紹酒一甀、五十浄斤　　紹酒一甀（ぼう）、五十浄斤
有花有酒、雪助精神　　花有り酒有りて、雪 精神を助く
花舊酒盡、可爲甀賓　　花旧く酒尽きて、甀の賓と為るべし
三友暢飲、合賞新春　　三友暢飲して、合（とも）に新春を賞す

題詩に続く最後の二行には、「光緒五年己卯冬日　彭城金士恒戲筆」と記して、「金麻子印」（白文方印）と「士恒」（朱文方印）の二印が捺されている（図5）。なお、「海岳経臨一士」の遊印（白文印）が画面右下角に捺されている。

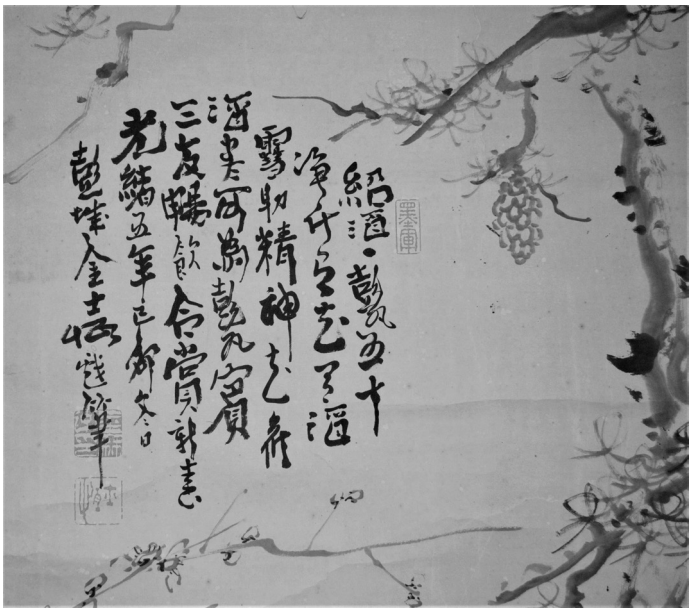

図4　題詩の部分拡大

隷意の強い書であり、第三行の「雪」はまさに隷書の結体である。また、第一行の「紹」の糸偏、第一・二・四行の「酒」の三水や第六行の「光」、第七行の「彭」などに隷書の筆意が濃厚に表れていよう。鄭板橋や李方膺ら「揚州八怪」の書風と一脈通じるものを感じる。

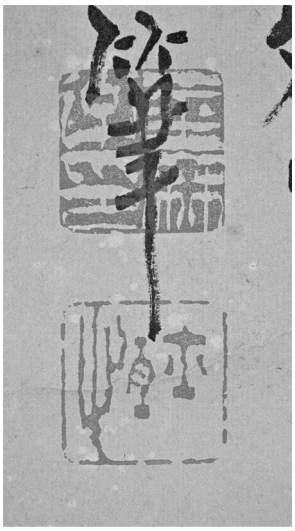

図5　印影「金麻子印」と「士恒」

また、紹興酒の大甕にも、淡墨で「京荘紹酒／全壇汁／五十斤／浙紹／恒製造」と書かれている（図6）。大甕には上記の十五文字が、甕を横倒しにして書いたように書かれている（図6では、文字が読み易いように画像を右に九〇度回転させてみた）。作者の遊び心を窺わせるものと言えよう。

なお、京荘紹興酒の色は薄い黄色だったそうだが、新中国成立後は作られていない。

図6　大甕の部分拡大

松竹梅の三友に五十斤の紹興酒が入った大甕の図。題詩は、三友とゆったりと酒を酌み交わして新春を祝うという内容である。「甀」は大きな甕、「五十浄斤」は、（大甕の中に紹興酒が）正味五十斤（ある）の意。「暢飲」は、心をのびのびとさせて酒を飲むこと。「合賞新春」はみんな挙って新しい年の春を楽しむ意。韻字は「斤、神、賓、春」で、十二文韻（斤）と、十一真韻（神・賓・春）との通押。

ところで、三友図に紹興酒の大甕を配するという着想は、李白の「月下独酌」詩から得たものではないかと思われる。「月下独酌」の初めの八句を見てみよう。

花間一壺酒　花間　一壺の酒
獨酌無相親　独酌　相い親しむ無し
擧杯邀明月　杯を挙げて明月を邀え
對影成三人　影に対して　三人と成る
月既不解飲　月は既に飲むを解くせず
影徒隨我身　影は徒らに我が身に随う
暫伴月将影　暫く月と影とを伴いて
行楽須及春　行楽　須らく春に及ぶべし
・・・・・・・・・・・・・・・・

賀知章らの推薦で玄宗に見出されて翰林供奉となった李白であったが、生来の放縦な性格によって宮廷生活になじむことはなかった。春の夜にむなしく桃の花の咲く辺りに酒壺を置き、独りで酒を汲むのであった。すると月が上り、影ができて、三人となった。しばらくの間、月と影を友として酒を飲んだのである。

李白の詩においては、春の夜、月と影を友として酒を飲んでいる。一方、金士恒の画と詩では、松竹梅の三友とともに酒を飲んで新春を祝っている。いずれも時は春、人間の情を解することのないもの（月と影／松竹梅の植物）を友として、目の前におかれた酒（一壺の酒／大甕の紹興酒）を飲むという趣向である。まことに似た設定と言えるではないか。

金士恒が李白の一壺の酒の代わりに置いたのは、紹興酒の大甕であった。李白が長安の都の朝廷に仕えることができたのは、酒好きの賀知章のおかげであった。賀知章の故郷は他ならぬ紹興である。李白の詩に「対酒憶賀監二首」がある（賀知章は秘書監を授けられたことにより「賀監」と称せられた）。李白の「月下独酌」から、金士恒は、賀知章の故郷の紹興で作られた好物の酒を連想した、と考えても不思議ではなかろう。

「三友暢飲図」はおそらく日本の数寄者の依頼によって彩管を把った作品であろう。新年の床の間に飾る画を所望されたのではなかったか。

四、金士恒が紹興酒の大甕を描いた作品

金士恒の作品で、紹興酒の大甕を描いている作品が他にもある。上海馳翰拍売有限公司の二〇二〇年迎春芸術拍売会（二〇二〇年五月）に出品された「清供二幅」のうちの一幅。一三七×一七糎の聯幅。中央左に細長い大甕を描き、その口からは柄杓の柄が出ている。その下には梅花と蘭花が描かれている。「三友暢飲図」と同様に、大甕の表面には淡墨で文字が書かれている。「紹酒一甃、五十浄斤、京荘宝裕字号」とあり、初めの四言二句は、「三友暢飲図」の題詩の冒頭と全く同じである。制作時期も光緒五（一八七九）年正月であり、同年の冬に制作された「三友暢飲図」と時期が近い。なお、「宝裕字号」とは紹興酒を扱う老舗の「宝裕酒店」を表わし

ている。金士恒は宝裕酒店の京荘紹興酒がお気に入りであったのだろうか。

さらに、「三友暢飲図」と似た構図で、歳寒三友と紹興酒の大甕を描いた作品がある。北京東方大観国際拍売有限公司の二〇一五年秋季拍売会（二〇一五年一一月）に出品された「清供図」。題詩の七言詩に続けて、「光緒五（一八七九）年己卯冬、於蘆都客次」という識語が添えられている。よってこの作品は、蘆都（おそらく京都）で描かれたものと知れる。その年の冬に京都に滞在していたとなれば、「三友暢飲図」も同じく京都で描かれた可能性が極めて高いであろう。

日本人も好む松竹梅、それに中国江南ならではの紹興酒の大甕を搭配するのは、前述したように、人の興味を拽く術を身に着けた金士恒ならではのアイディアであると言える。おそらくこのアイディアは日本人の青睐を博したのであろう。光緒五年に、金士恒は紹興酒の大甕を画中の中央に据えた画を、少なくとも三点描いているからである。実際には、この他にも同工異曲の画を幾つか描いたのではないか。

五、結　語

金士恒の「三友暢飲図」は、三友図に紹興酒の大甕を配した独特の画題であった。その画の内容や題詩の内容を分析すると、李白の「月下独酌」詩から構想を得たのではないかと思われる。

李白を推挙した賀知章は紹興の人である。金士恒も江南の人であるので、李白に負けず劣らぬ酒好きの賀知章に対しては親近感を持ったことであろう。金士恒は本図を描く以前に、似た構図の画を描いている。来日してから、日本人に受け入れられるような画を描いたようであるが、日本人好みの松竹梅の画に江南らしい紹興酒の甕を配することにより、すでに日本化した画題に作者自身の個性を加味したものとして、当時の日本の数寄者たちに好意的に受け止められたことであろう。

金士恒は、当時の陶芸家として、かなりの教養と詩書画の才能を有していた特筆すべき人物と言えよう。もちろん、科挙に応ずるような高級知識分子（インテリ）ではない。中国は厳格な階級社会であったので、これまでこのような人物に光が当てられる機会は多くなかった。今後は、金士恒はもとより類似の美術家にも注目していく必要があろう。